

(雜 錄) ○大島近海採集旅行の記

數年前政府は九萬四千匹の狐を買ひ上げ今もそれを實行してゐる。近頃電報の報知する所に依れば三萬の濠洲兎毛皮は紐育にて高價に取引されたとか、本年(一八二〇年)の一月は同市に於て八萬の濠洲赤狐毛皮が賣られ、其後四萬枚の賣買があつたなど通知されてゐる。

狐は歐洲にては一産に二匹の仔を産むのだが此處では六匹乃至八匹を産む。

猫、飼養動物中猫程直に外界に適應して行く動物は無い、猫は濠洲にて兎を驅除する爲めに牧羊場で放したのもあるが、又海岸にて難波船より逃亡し野猫となつたものの多きも注意せなければならぬ。諸地方を旅行して野猫を見るが、北西濠洲の不毛地を探險した時、人家より四百哩も離れた地點で一匹の美しい毛のフサ々とした猫を見て驚かされたことがある。又或ラグリーンに達した時四十七匹の猫の骨骸が横はつてゐるのを數えたが之等はラグーンの水が乾いた爲めに渴死したものだ。北西地方では土人は猫を食用に供してゐるが、脂肪が多くて非常に之を好むのである。

鹿、六十年程以前或金持の地主が鹿を柵飼してゐたが、それが逃亡したのか或は放したのか忽ち増殖し或地方では果樹園を害されて苦しみ或は大麥小麥の畑を襲はれ非常に苦しんでゐるのである。余がストラズブロークの妹を訪問した時夜中に鹿の鳴くのを聞いた故犬を以て追はした所、犬は鹿群に接近することが出来ずして逃げ

て来た。明朝になつて調べた處、作物は全く鹿の爲めに蹂躪され、恰も五十匹の鹿の荒したと思はれる程の大なる損害を被つた。

上述せる動物の著しき蕃殖は實に少數の親より増えて、且ついつも親動物よりも常に大きく、強壯に育つのであるから新開地に動物を移入するには大に注意を要することである。

(五島博士談)

●大島近海採集旅行の記

此稿を書き始める前に、先づ貝類や蛛蜘蛛類の種名鑑定に此盡力下さつた、畏兄平瀬信太郎、岸田久吉兩氏に厚く御禮を申し上げて置きます。尙ほ採集した標本の内、ハイドロゾアや、ゴカイ又はカニ類の大部分は、此原稿を出す時迄に、鑑定が間に合はなかつたので、記入が出来ませんでした。何れ、此等は、飯塚博士、篠原雄氏や、其他の方々が、將來報告される事があるかも知れないと思ひましたから、此稿には、強ひて記入致しませんでした。尙ほ私の採集しました標本の内、御研究材料として、御入用のある方は、御遠慮なく御申越下さい。持ち合はせの分だけは、全部差上げますから。

去年の夏、自分は伊豆七島近海の高産動物採集を思ひ立つて、七月の中頃から、三崎の實驗所へ行つて其用意をしたが永らく天候が定まらなかつた爲に、其出發は遂

に八月の十一日に延びた。當日油壺を、道寸丸で出帆したのは、午前八時で、一行は青木船長の外、水夫五人と、岐阜師範の猫山常藏氏、朝鮮平壤女學校の梶原梅次郎氏等であつた。大島の波浮港に着いたのは、實驗所を出發してから六時間の後で、何處かに暴風雨でもあつた爲か、一丈餘の波浪が、海岸に何個となく、柱の様に突き立つて居る、赤い火山岩の、岩角に當つて、碎ける狀が、實に壯快である。遙か沖にはゴンドウ鯨が汐を吹き上げ、白浪を立て泳ぎ廻つて居るのも見えた。波浮に一泊して、十二日の翌朝、未だ朝霧の港を立ち籠めて居る頃、波を蹴つて、島の東南約二里半の沖合にある、大室出と云ふ浅い瀬に着いた。此處が、此度の採集の第一地點である。方經五里もある、三十尋から九十尋位の、浅い大きな瀬で、暖流の主流は、其の北西の端を洗つて、大島の南岸の方へ流れて居る。先づ採集をする前に、一二回潮流測量をやつて見たが、未だ網を入れる様な汐でない爲めに、少しく時をおいて、第一回の採集を試みた。二時間餘り、西南の方へ網を流して獲たものは、比較的豊富であつたが、採集物の大體は、矢張り、相模灣の此處と同様な深に棲む生物と、殆んど同じであると云つて差違なからう。(一體我々が、此度斯様に深い處の生物を、採集するに主に使つた採集具は、珊瑚網とダボ繩とであるが、前者は單に四國近海で珊瑚漁業に使つて居る網を其儘用ひて居るのが、唯だ少しく其使用の形式

を變へて居る。又後者は從來屢々飯島先生が、海綿採集等の際に、使はれたもので、其詳細は理科大學紀要第十五卷 貢に、記してある)。

第一採集地點から獲れたものゝ主なのは、

Palytremia, *Plumularia*, *Condyliactis*, *Aleyonium*, *Caryophyllia*, *Nephytha*, *Plumarella*, *Melithodes*, *Antipathes*, *Siphonogorgia*, *Dendronephthya*, *Cidaris*, *Temnopleurus*, *Ophiotrix*, *Ophiozona*, *Ophiomusium*, *Actinometra*, *Astropecten*, *Cucumaria*, *Thelapus*, *Terebratella*, *Palynoë*, *Serpula*, *Spirorbis*, *Pylochelidae* の *Caprella*, *Pantopoda*, *Apsudes*, *Cellepora*, *Membranipora*, *Bugula*, *Cellaria*, *Retepara*, *Caberea*, *Menipea*, *Crisio*, *Tubulipora*, *Pinna attenuata*, *Pedicularia pacifica* Pease., *Chlamy vesiculosa* Dunker, *C. irregularis* Sowerby, *Limna* sp., *Limnopsis* sp. 等であつた。

尙ほ採集網を曳き上げる時に、よく網に *Rhizophysa* や *Vella* が引掛つて來るのを見た。

此等の採集物の内で、特筆す可きものは、伊勢蝦の幼い時代のもので、之は中澤理學士の鑑定によると、去年八月十日、三崎實驗所を離る一哩半の西南沖、五六十尋の深さの淀と稱する場所で、獲れた標本と、全く同じで、フェルルールス時期幼蟲である。全體が無色透明で、内部の諸器官が、外から十分に見える。然し胸部の附屬肢の先端には、紅の色素が少しある。一體今迄は、伊勢

蝦のフィロゾマから、親になる迄は、どんな變態をするか、又何んな場所に生活して居るものであるか、全く不明であつたが、此等の標本から考へて見ると、伊勢蝦の生活史の大略は、稍々推察し得る様になつたとも思へる。尙ほダボ繩で、キダイ、トラフオコゼ、サクラダイに近いもの、又は 近い魚を、澤山獲つた。第二回目に採集をした地點は、利島と大室出との間で、深さは百から百六十疔もある。利島と鵜渡根島の間を流れて來る暖流は、直接此處には影響がない様である。獲物は、第一採集地點のとは、其趣を稍々異にして居て、重なるものは、六放海綿の類であつた。即ち *Ferrea Eurete*, *Hexactinella* に屬する種類である。

尙ほ四放海綿の二三種をも採集する事が出來た。此採集を終へて、船は益々南西に進み、利島、鵜渡根島を右に見、新島の西海岸を左にして式根島に着いたのは、太陽が西の水平線下に丁度没するの頃で、何から何まで紅の色に染まつて居る様に見えて居た。早速標本の整理をして、上陸したのは八時。椿の繁込つた、眞黒な林の中の小徑を、案内されて、とある小さな旅屋に着いた、其處で一夜を明した。此島は、近所の新島や、利島よりは、樹木が餘程多く、椿の外に黒松等が、中々よく繁つて居る。蛙が居そうにも見えるので、土人に聞いたが、未だ見た事がないとの事である。東京等から蛙を持つて歸へると、小供等は非常に喜んで、玩具にすると云つて居

た。十三日の朝は、潮の具合が悪かつたので、海岸にある温泉にも浴する事が出來ず、此島を離れた。今日の目的地は、新島から約三四里西北に當る沖合で、高瀬タカセと云ふ所、三崎の漁夫が、一月から五月頃の間、よくメナダを釣りに來るので有名である。此瀬は、南北に細長い形をして、約長徑二里、短徑一里、その深さは三十疔から八十疔、サメの類が常に多く棲むで居ると云ふ事である。案の狀、釣を垂れたら、立所に大きなツノザメが澤山獲れた。中で最も大きな雌を、解剖すると、可成り發達した胎兒が、六匹見出された。未だ大きな卵囊を持つて居て、卵黄囊動脈の内へ、血液が盛んに流れて行くのが好く見える。血管系統は、ラブカ等と殆んど同じ様な状態を示して居た。此處で二回採集を試みたが、獲物は殆んど、色彩の艶美な珊瑚礁に住む様な、動物が多かつた。即ち此處が第三採集地點で、獲物の主なものは、

Eurete, *Ferrea*, *Lonchiphora*, *Citaria*, *Tennopleurus*, *Caryophyllia*, *Melitodes*, *Acanthogorgia*, *Acabaria*, *Plumarella*, *Junplexaura*, *Paraplexaura*, *Stachyodes*, *Lophohelia*, *Dendrophylia*, *Polynoe*, *Pyrochelidae*, *Arcellaria*, *Tubulipora*, *Cellepora*, *Lichenopora*, *Rotepora*, *Caberea*, *Adeonella*, *Brethia*, *Serripocellaria*.

午後からは、風が強くなつて船が動搖し、到底仕事が出来なくなつたので、約五時間を費して、波浮の港へ引上げた。歸路、大島の東南の端に近寄ると、二三丈も高

い、白い煙を立てた、大きな波が、碎けて居るのが見えた。十四日即ち、採集に出てからの四日目は、朝から東の風が強く、時々驟雨があつたが、兎に角採集に出掛け様と思つて、波浮の港を出たが、到底激烈な波濤の爲に、採集等は出来ないで引返した。詮方なく、午後から港の後の山へ、採集に出掛けた。杉林の中には、大きな *Scelopendra* や、*Julus* が澤山居た。蛙や蛇に氣を付けたが、遂に兩方とも一匹も獲る事が出来なかつた。然し小學校の標本室内には、此山で獲れた蛇が、三四種酒精漬になつて居るのを見た。尙ほ途中採集した蜘蛛の中には、次の様な種類が居た。 *Theridion tepidariorum* L. Koch. (オホヒメグサ)、 *Leucauge blanda* (L. Koch.) (ギンコブ)、 *Nephila clavata* L. Koch. (ヂョウラクグサ) *Dolomedes sulfureus* L. Koch. (ユウクイロハンシグサ)。宿に歸つて晝飯を喰へたところが、其時膳部に出た、クシロと云ふ魚の鰓には、どれも大小の *Cyathoia* が、三四匹づゝ附着して居たのを見た。五日目には、以前から目指して居た、利島の西北一湊沖の淺所で、採集し様と思つて、出掛けた處が、暖流の勢が、非常に激しいので、到底網を曳く事が出来なかつた。詮方なく、第一回採集地である、大室山の東北の一隅で、採集する事にした。水深は矢張り四十疔から九十疔の間である。採集物は、第一回のものと同小異で、特筆す可きものがなかつた様に思はれた。十六日は、天候も殆んど定まつ

(雜 録) ○大島近海採集旅行の記

て、海も非常に静かになつたから、早朝から波浮の港をすて、出帆した。早速前回に失敗した、利島の西北沖合をめがけて行つて見た處が、矢張り潮の速さが、激しいので、採集は不可能となつた。詮方なく其處から眞北に當る、所謂潮別で、採集する事にした。此場所は、大島の南岸から、約二湊ばかり南東に當る、淺い瀬の深みへ陥ち込む崖際で、深さは百疔から百七八十疔位ある。利島の方から來る暖流の一部は、此處にぶつかつて、二つに別かれると云ふ事から、潮分と云ふ、名が起つたとの事である。此處で採集した主なものは、*Polytrema*, *Siphonogorgia*, *Melitodes*, *Stachyodes*, *Antipathes*, *Isis*, *Euplexaura*, *Lophobelia*, *Cidarina*, *Ophiozona*, *Ophiothrix*, *Ophiocoma*, *Ophiacantha*, *Actinometra*, *Antedon*, *Unidia*, *Cucumaria*, *Stylocordyla*, *Steganoporella*, *Tubulipora*, *Retepora*, *Reteporella*, *Cyclostomella*, *Scrupocellaria*, *Cellaria*, *Caberea*, *Lichenopora* 等であつた。其の外單軸、石灰、六放海綿等の若體標本が、澤山手に入つた。多くは蘚蟲や、ウニ等の表面に附着して居る。又 *Crateromorpha corrugata* の可成り大きなのが採集されたが、*Syllis* は見付らなかつた様だ。此處で二回採集して、元村の人家や燈臺を右に見て、大島の北西沿岸にある岡田村に着いたのは、午後四時半、早速標本を整理して上陸した。元村に一泊して、早朝二里の山路を越えて、再び岡田村へ出た。道すがら採

(雜 錄) ○線蟲類のクチクラの化學的成分 附、キチン質に就いて

三四

集した蜘蛛は、五六種あつて、其の内波浮で採集したのと同じなものも、二種類ばかりある。即ち *Theridion tepidariorum* O. L. Koch. オキヒメダマ、*Argiope brunniclavis* (Scopoli) コガネダマ、*A. minuta* F. Karsch. コガネダマダマ、*Leucage blanda* (L. Koch.) ギンコブ、*Nephila clavata* L. Koch. ショウラクダマ、*Celotes* sp. (幼體)。尙ほトカゲの類では、*Hemeces elegans* BOTTLINGER を採集した、此種はスタインガーが、嘗て臺灣とバスカドル島とで、獲れた標本を、記載して居るばかりで、大島では、始めて知られたものである。元來原種は、支那の中部で採集されたのが始まりで、其他の場所では、前に記した二箇所を除く外、未だ知られて居ない。此種は、大島の此地方では、可成澤山棲んで居て、石垣や草叢の崖等に屢々姿を見せて居た。カナヘビの類では、内地の *Tachydromus tachydromoides* と餘程似て居る種類が棲んで居る。之はトカゲよりは、比較的少い様にも見えるが、矢張り崖等に、澤山爬つて居るのを、目撃した。内地の種類と異つて居る點は、色々あるが、主なところは Supraocular と Parietals との間にある、plate や Temporal と Nuchals の形狀が、異つて居る事である。然し *Tachydromus tachydromoides* の、南型とでも云ふ *Tachydromus dorsales* とは、又少しく變つて居る點がある。

午前十時道寸丸に乗つて、愈々大島を離れて、實驗所への歸路に就いた。途次岡田村が約二十町ばかり真

北へ行つた處、俗に此處を仙洲前セムスと稱して居る、水深は二百から二百五十呎で、獲物は専ら六放海綿ばかりで、主なものは、*Farrea*, *Eurete*, *Aphrocalistes* 等であつた。此採集を終へて、懐しい油壺の水上に、道寸の英姿を浮べたのは、拾七日の午后五時頃であつた。

(岡田彌一郎)

●線蟲類のクチクラの化學的成分 附、キチン質に就いて

線蟲類のクチクラはキチン質であるとは古くから云はれて居ることであるが、近來の研究に依るとそれは誤りで全く異なつた物質から成つて居るといふ説が唱導せられる様になつた。殊に、アメリカの線蟲學者である THOMAS B. MCGAHEE の最近の研究 (Trans. Amer. Mic. Soc., Vol. 33, No. 2, 1919) は頗る周到なるもので、キチン質でないといふ説を確定的に證據づけたのである。これら新説者に依ると、線蟲類のクチクラを成すものは決してキチン質ではなく、コルネイン (Cornelin) なる物質であるといふことになつた。この結果が Nematode Technique に對し少なからぬ變更を餘儀なくさせたことは云ふまでもない。

コルネインとは如何なる物質で、何時如何なる人が作つた名稱であるかといふ事柄は、キチン質に關する事柄と關連して述べ様と思ふ。